

エッセイ

『イエメン日誌』第2回

林 克好（前駐イエメン共和国日本国大使）

Ⅲ イエメン社会の諸相（第1回からの続き）

イエメン人ユダヤ教徒

2013年8月14日、テルアビブのベングリオン空港に17人のイエメン人ユダヤ教徒が降り立った。このうち3人はイエメンから、14人はアルゼンチンのブエノスアイレスを経由して到着した。2009年以降、151人のイエメン人ユダヤ教徒がイスラエルに到着、2013年にはこれまで45人イスラエルに移住した。ユダヤ機関によると、イエメンに残っているイエメン人ユダヤ教徒は90人未満。8月15日のイスラエルのハアレツ紙はそう報じた⁽¹⁾。イエメン人ユダヤ教徒の起源は明らかではない。考古学的には2世紀のヒムヤル王国にシナゴグが建設されていたという記述が残っているらしいが、それ以前からイエメンにユダヤ教徒は住んでいたようだ。シバの女王の時代にユダヤ教に改宗した部族の末裔であるとか、ソロモン王がイエメンに派遣した貿易商人達の末裔であるとか、預言者エレミヤの時代に移住したユダヤ人の一団の末裔であるとか、諸説さまざまである。ユダヤ教徒の人々は手工芸にすぐれ、すばらしい銀細工をイエメンの文化遺産として残した。

第一次世界大戦が終わりオスマン帝国はイエメンから引き揚げた。その後イマーム・ヤヒヤがイエメンでの支配地域を広げていくが、ヤヒヤの治世下、ユダヤ教徒への差別は厳しくなった。イマーム・ヤヒヤが復活した孤児法は、両親を亡くした未成年のユダヤ教徒はイスラム教に改宗させるというものであった。歴史上何度かイスラエルの地に向けた移住の波はあった。世界中を驚かせたのは、1949年6月から1950年9月にかけてユダヤ機関が米国のユダヤ団体の支援を得て実施した「魔法の絨毯作戦」である。イスラエルの独立直後に行われたこの空輸作戦により50,000人近いイエメン人ユダヤ教徒がイスラエルの地に移住した。アラスカ航空のチャーター機など米国民間航空機や米軍輸送機がアラビア半島南端のアデン近郊にある英国軍基地に飛来し、イエメン各地から集まったイエメン人ユダヤ教徒を密かにイスラエルに運んだ。アラスカ航空には第二次大戦後、「ベルリン空輸」で活躍した実績があった。

2013年1月の汎アラブ紙「アル・ハヤート」と「イエメン・タイムズ紙」は、イエメンに住むユダヤ教徒は約400人で、そのうち350人が首都サヌア北西のアムラン州に、50人がサナアのツーリスト・シティに住むと報じていた。この50人は2008年、北部サアダ県で起こったユダヤ教徒迫害の暴力行為から逃れてきた人たちだった。このコミュニティの代表であるラビ・ヤヒヤ・ムーサはユダヤ教徒子弟にヘブライ語を教えていた。子供たちは4～5歳の頃からヘブライ語と宗教を学び、14～15歳になると米国やイスラエルのユダヤ人学校に移ってしまうという。1930年代にはサナアにシナゴークが40ほどあったそうだが、今はひとつも残っていない。

報道によると、イスラム教徒住民の異教徒に対する無理解からユダヤ教徒に対する嫌がらせや差別が絶えない。時には強盗や殺害事件も起こっている。アムラン州ライダ地区のラビ・スレイマン・ヤヒヤによると、その地区の住民は不動産の処分ができ次第、イエメンを去ることを考えているという。

サナア近郊のベイト・ボースの岩棚の上にかつてユダヤ教徒が住んでいたという村が残っている。今、100戸程ある家はほとんど廃屋で、イスラム教徒が数家族住んでいるだけである。町に入る唯一の門に通じる道は一本の岩道のみ。町の広場に面してシナゴークとおぼしき煉瓦造りの建物が残っている。2014年9月に首都サヌアを軍事制圧したホーシー派のスローガンは、「アメリカに死を、イスラエルに死を、ユダヤ人に呪いを、イスラムに勝利を」である。

2016年3月21日のBBCは、ユダヤ機関の発表として、複雑な秘密工作の末、最近イエメン人ユダヤ教徒19人（14人はライダ地区から、5人はサナアに住んでいた家族）がテルアビブ空港に到着し、一行の中のラビは500～600年前のトーラを持参したと報じた。同機関によれば、イエメン人ユダヤ教徒50人がイエメンに残ることを希望し、そのうち40人は首都サナアの米国大使館の建物に近い地区に住んでいる。ユダヤ機関のナタン・シャランスキー総裁は、世界最古のユダヤ人コミュニティの一つの歴史の章は終わろうとしているが、イエメン人ユダヤ教徒の2000年にわたる比類なきユダヤ人社会への貢献はイスラエルにおいて続いていくであろうと述べた⁽²⁾。

同じ出来事について、「タイムズ・オブ・イスラエル」紙は、2年にわたる工作活動の結果19人がアンマン経由空路イスラエルに到着したと伝え、汎アラブ紙「シャルクルアウサト」の記事を引用し、ホーシー派を買収してホーシー派支配地域の安全通行を確保したと報じた。また、古いトーラが持ち去られたこととの関連で、イエメン人ユダヤ教徒1人、イスラム教徒1人が拘束されたと報じたが、今回脱出に成功したメンバーの親族の一人は、トーラは何百年も彼らの家にあったものだと言及した⁽³⁾。

2020年8月9日の「タイムズ・オブ・イスラエル」紙は、アラブ首長国連邦（UAE）の国営通信の報道として、UAEの支援で、ユダヤ教徒の家族がイエメンとロンドンからUAEに到着し再会を果たしたと報じたが、その家族がどのようにイエメンを出国できたのかなど詳細は一切明らかにされなかった⁽⁴⁾。

サナアーニー（サナア人）

サナアのあるファミリーの家長はこんな話をしてくれた。

1948年、イマーム・ヤヒヤが暗殺され、後継者のアハマドは首都をタイズに移した。サナアに権力の空白が生まれ、部族民がサナアを略奪した。この家長の家にも部族民が押し入り、ドア、窓枠、女性のアバーヤ（裾の長い外套）、赤ん坊の敷布団までもが奪われた。家長の父は全財産7リヤルをもってアデンに向かった。アデンでたまたま入った店で話し始めると、店主が家長の父の父（つまり、家長の祖父）のことを覚えていた。「あなたのお父さんは信用のおける人だった。きっとあなたも、そうに違いない。」そう言って、信用売りをしてくれた。アバーヤ7, 000枚を購入した。サナアに持ち帰り150%の利益を上乗せして売ったが、飛ぶように売れた。家長の父はアデンに戻り借金を返して、さらに商品を買込み、サナアで商売人として復活した。当時アデンには何でもあり、サナアには何もなかった。アデンからサナアに物を運ぶのに通常トラックで一か月半かかった。道がぬかるむと乾くまで待つしかなく、さらに時間がかかった。

イエメンの歴史は激しい。1974年に大統領になった北イエメンのハムディ大統領は清廉潔癖な統治で、部族を厳しく律した。公用車を私用に使うのを禁じ、警護もつけず隠密に町の視察に出かけた。ハムディ暗殺は、彼の後を継いで大統領になったガシュミの邸宅の地下で行われた。まずハムディの兄弟が、次にハムディが殺害された。ハムディの遺体は大統領のレストハウスに運ばれ、別途、フランス人女性2名を殺害してハムディの遺体の傍らに置いて女性がらみの事件と見せかけた。タハリール広場で行われたハムディの葬儀に集まった人々は参列者の中にガシュミがいるのを見つけて、「アイナ ハムディ ヤー ガシュミ」（ガシュミよ、ハムディはどこにいる？）と叫びはじめ、怒りを露わにした。ガシュミはほうほうの体で逃げ去った。それほどハムディ大統領は人気があった。

8か月後に今度はガシュミ大統領が南イエメンからの特使に爆殺された。ガシュミはルバイヤ・アリ（南イエメン大統領）からカート（イエメンやアフリカの角諸国で嗜まれる覚醒作用のある植物）の代金が届いたと思った。特使が持ってきたブリーフケースを開けた途端、爆発した。ガシュミの胴体が吹っ飛び、頭と、椅子に座った足だけが残っていた。ソ連が裏で糸を引いたとも言われた。そしてサーレハが大統領の地位に就いた。1978年6月のことだ。サーレハはその後33年にわたりイエメン社会を腐敗させ、賄賂社会にしてしまった。財務省も裁判所も賄賂を渡さないと申請書類が動かない。初審裁判所の裁判官は総勢15人で、一人あたり700～800件の訴訟を抱える。賄賂を渡して早く審理してもらう必要がある。そして裁判に勝つにはさらに賄賂が必要だ。裁判官でさえ賄賂を受け取る。

サナア旧市街には小川が流れ緑地もあった。イエメン門は夕食のお祈り後に閉まり、翌

朝6時に開いた。門の幅は昔は3メートルしかなかった。旧市街に武器を持ち込むのは許されなかった。門を入るところで預ける必要があった。旧市街の各ハーラ（居住地区）では住民が助け合いながら生活していた。他の居住地区や外部から人が来れば、すぐに自分の居住地区の住人でないことが分かった。外部の者は旧市街の中では1泊しか認められなかった。こうして治安を確保していた。通りは迷路のように入り組み、外敵を攻撃しやすい構造になっていた。建物は隣家とくっついていて、横棒を通して地震対策もしていた。夜中に病人が出れば助け合った。1962年までサナアの町は今の旧市街の部分だけだった。町を取り囲む壁の外側は緑の農地だった。そのころは樹木が茂る郊外だったハッダ地区でもサナア市内で水をくみ上げるポンプの音が聞こえるほど静かだった。旧市街を囲む壁の外に人々が住み始めたのは1962年の革命で王制が倒れてからだ。

こう話してくれた家長の祖先は300年前にアムラン県のハーシドからサナアに移ってきた。ハーシドでは部族長であったが、今はサナアーニー（サナア人）であることを誇りにしている。サナア人氣質、それは、部族民ではない、町の間人としての氣質だ。「サウジからもらった金貨をもって部族民が父親の店によく買い物に来ていた」とちょっと蔑んだ感じで家長は話した。サナアーニーの名家として、カーブース、スネイダールの名前を例として挙げた。サナアーニー同士の連帯感があると語った。サーレハ前大統領も、サナアーニーの血を受け継いだのか、妻の2人はサナアーニーだと言った。

イエメン内戦（1962年～1970年）末期の1968年、最後のサナア包囲があった。当時家長は東独から機械類を購入し販売していた。東独大使館に輸入代金を支払い、大使館は東独の輸出公社に代金受け取りを連絡し、その代金を大使館の運営経費に充てていた。東独大使館員がサナアを脱出する際、砲弾が飛び交う中、家長は最後の館員を飛行機まで送った。家長は大使館の鍵を預かった。東独外交官を乗せた飛行機が空港からタイズに向けて離陸したのを見届けて家長は、空港ターミナル・ビル近くにあった、砲弾の落下でできた穴に身をひそめて砲撃が静まるのを待った。それから20年以上も経ったある日、家長に大使館の鍵を預けた旧東独大使館員が統一ドイツの商務参事官としてイエメンに戻ってきたという。

信用社会

イエメンの一族は家系図をもっている。家系図を作る家系図屋もある。一家の長老が祖先の名を家系図屋に告げると知識豊かな家系図屋が家系図を作ってくれる。商売になるほど需要があるということで、縁談の際の背景調査には欠かせないらしい。イエメンの歴史を生きてきたサナアのある一族の家長は、わが家には皮に書いた家系図があると言っていた。その家長が、信じられないだろうが本当にあった話だと言って、こんな話をした。

ある日、ひとりの老人がサナアの旧市街の店に入り、メッカに巡礼に行くので帰るまで金貨を預かってほしいと頼んだ。店主は快く引き受け、老人は巡礼に旅立った。しばらくして老人が巡礼から帰ってきた。老人は預けた金貨を受け取ろうと店を訪れた。しかし、老いのせいだろうか、金貨を預けたのとは別の店に入ってしまったことに老人は気づかなかった。店には客が6～7人いた。老人は預けた金貨を取りに来たと言い、店主は言われたとおり金貨を渡した。それからしばらく月日経ち、老人が旧市街のある店の前を通りかかると、店主が飛び出してきた。こう言った「あんた、どうして金貨を取りに来ないのかね。預かったままだよ」。この時はじめて老人は間違った店の主人に金貨を返してもらったことを悟った。老人はその店を捜しあて、金貨を返し、店主に尋ねた。「どうして、あの時わしが店を間違えていると言わなかったのかね」。すると店主はこう言った「じいさん、あの時、店には客が6～7人いた。わしが、金貨なんて預かってないよ、なんて言ってごらんない。あの客たちは、あなたが年老いているのをいいことに、わしがあなたから金貨をくすね取ろうとしていると考えたに違いない。そしてきっとそれを他人に言いふらしただろう。そんなことになったらわしの信用は台無しで、客が店に寄り付かなくなるよ。だから黙って金貨を渡したのさ」。信用はイエメン社会でとても大切な財産だ。

あるビジネスマンの述懐

あるビジネスマンが、**以下のように**話してくれた。

1960年代にはアブダッラー・アハマルは無名の部族長だった。1968年のクーデター未遂の時、サナア市内の治安が悪くなった。アブダッラー・アハマルは自分（語り手のビジネスマン）の家を守るために15人の部族民を派遣してくれた。食事と寝る場所は提供したが、金は払わなかった。そんなこともあり、自分はハミードなどアブダッラー・アハマルの息子たちとは小さいころ一緒に遊んだ。王制時代、アハマル家は君主イマーム・ヤヒヤへの恭順の徴として、アブダッラー、ムジャーヒドという二人の息子を人質にとられていた。彼らはイマーム・ヤヒヤの下で育ち、教育も受けたのだ。アブダッラー・アハマルを大きくしたのはサーレハだ。サーレハが甘やかし、好き勝手にさせたため大きな力をもってしまった。イエメンに必要なのは腐敗をなくし、部族を押さえ込む強い指導者だ。ハーディ大統領は、人柄はよいのだが・・・。

イエメンのまともなビジネスマンは汗をかき地道に少しずつ大きくなってきた。ハーイル・サイード、アドバン、バザラア、ジョモアンなど皆そうだ。最近では自分の金で大きくなったのではないビジネスマンが幅を利かせているが・・・。

33年に及ぶサーレハ大統領支配でイエメンという国が潰されてしまった。サーレハやアハマル一族など国を台無しにした連中が国に留まっている限り、イエメンがよくなるは

ずがない。イエメンの最大の問題は腐敗。サーレハが金で政治を動かす手法を一般化し、行政、司法は上から下まで賄賂がなければ動かなくなった。

1970年代、80年代には外国人誘拐などなかった。1990年以降、治安が悪くなった。南北イエメン統合が治安を不安定にし、第一次湾岸戦争（1990年）でイエメンがイラク支持の立場をとったことで80万人の出稼ぎ労働者がサウジアラビアから帰国を余儀なくされた。金銭目当ての誘拐がはじまったのはこの頃からだ。

経済を改善するには治安改善と安全確保が第一である。安全でなければ投資は来ない。観光客も来ない。部族民が武器を持って街中を闊歩するようになったのはサーレハ政権になってからのことだ。北の部族は昔から騒ぎを起こす元凶だった。サウジアラビアはイエメンの部族長2700人に月々、金を払い忠誠を買ってきた。月に2500万ドルかかるといわれる。最初のころはマリアテレサ金貨で払っていた。サウジアラビアに対して悪さをさせない、イエメン国内をいつでも混乱させる手先をもつ、この2つの目的からだ。イマーム・ヤヒヤやハムディ元大統領は力で厳しく部族を押さえ込んでいたが、サーレハは金で部族を懐柔し、時には利用した。サーレハは北部のホーシー派を叩き潰すチャンスが何回かあったのに、サウジを悩ます道具にするため息の根は止めなかった。他方、サウジアラビアはサーレハを全く信用していなかった。

バザラア・ファミリー

アブバクル・バザラアは一代でイエメン有数のファミリービジネスを築いた。一族はハドラマウトのドアン溪谷を故郷とするが、バザラア家は早くからアデンに移り住んだためアブバクルはアデン生まれのアデン育ち。ドアン溪谷といえばイエメンの最高級蜂蜜の産地だが、オサーマ・ビン・ラーデンの一族の出身地として広く知られるようになってしまった。イエメンでバザラアといえば人々はトヨタを思う。そして日本を思う。南イエメンが社会主義に向かい始めた1965年、ビジネスの拠点を北イエメンに移した。この辺の事情は、その後北イエメンの経済界を背負うことになる多くのビジネスマンと共通している。

アブバクルが最初にトヨタ車を販売したのは1957年。1953年から米国製のトラックやチェコ製のスコダを取り扱っていたアブバクルだが、それらの製品はあまりにも故障が多く、米国から送られてきた自動車のカタログで見てトヨタの代理店になりたいと思ったという。そこでトヨタと連絡を取った。トヨタは「うちは小さな会社だから」と言って断ってきた。それでも諦めきれずにトヨタに手紙を書いた。2度目も断られたが、3度目によりやくトヨタから同意が得られた。1956年6月に最初の入荷があった日のことを今でも忘れないとアブバクルは言った。アラビア半島で最初のトヨタ代理店であった。2台購入したトヨタ・ランドクルーザーはGM車をベースにした車で馬力があった。最初

の購入者は、アデンからアビヤン地域にカート（覚醒作用のある植物）を運んでいたカート商人だった。

その頃はトヨタ車も故障が多く、目に見えて品質が向上したのは1967年頃からだったという。トヨタの成長とともにバザラア家も成長し、イエメン随一の自動車販売会社になった。バザラアが販売したトヨタ車の技術、性能、信頼性、耐久性はそのまま日本のイメージとしてイエメンの人たちの間に定着していった。イエメンに日本国大使館ができる何年も前からバザラア家は日本のイメージづくりに貢献していたのだ。イエメン自動車市場の8割がトヨタ車で、人気の車種はシャスと呼ばれる荷台付き4輪駆動車、イエメン山岳部の切り立った山の上の集落に辿り着けるのはこの車だけだとアブバクルは誇らしげに言った。

アブバクルは会長のポストにあったが、事実上一線を退き、アハマド、アブドルナーセル、アイドルースの3人の息子がしっかりと跡を継いでいた。長男アハマドは若手ビジネスマンからなるイエメン・ビジネスマン・クラブの初代会長で、将来イエメンのビジネスを背負っていく人物だと言われていた。ビジネス界代表として国民対話にも参加した。三男のアイドルースは社長を務めながらも「正義と建設党」のメンバーとして政治に関わり、国民対話にも参加した。アハマドもアイドルースもカートを噛まない新世代のビジネスマンだ。

ファミリー・ビジネス

イエメンのビジネスは、ファミリー・ビジネスだ。ファミリー・ビジネス・トップ10を挙げてほしいとある人に尋ねたら、以下のビジネスグループが例示された。トップ10かどうかは別としても、誰もが知るビジネスグループということなのだろう。（括弧内は2013年当時の代表）

- ハーイル・サイード・アヌアム・グループ（ムハンマド・アブド・サイード）
- タージ国際貿易（アブドルワッハブ・シナン・アブルフーム）
- サーベト・ブラザーズ・グループ（アブドルワッハブ・サーベト）
- ルワイシャーン貿易（ムハンマド・ビン・ヤヒヤ・アル・ルワイシャーン）
- 自動車・機械貿易センター（アハマド・アブバクル・バザラア）
- シャーリブ商業・マーケティング（ムハンマド・ムハンマド・シャーリブ）
- サーリム・シャンマーフ（マハフーズ・サーリム・シャンマーフ）
- サギールの息子たち（アル・サギール家の息子たち）
- スナイダール貿易（アブダッラー・アル・スナイダール）
- 平和貿易建設（ハミード・アブダッラー・アル・アハマル）

ーアドバン貿易（ムハンマド・ムバーラク・アドバーン）

ーユナイテッド自動車（シャーヒル・アブドルハック）

ハーイル・サイード・グループは、イエメン最大のファミリー・ビジネス財閥。イエメン人なら誰でもその名を知っている。イエメン近代化の中で生まれたサクセスストーリーだ。創始者のハーイル・サイード・アヌアムは、1902年タイズ県カルダ村の農家の3男として生まれた。ハーイル・サイード・アヌアム・グループのウェブサイトによると、アデンからタイズに本拠地を移すまでの背景はこうだ。

第一世代と、第二世代の主な人物は以下のようになる。

第一世代

第二世代

モハンマド（長男） — アリ（長男）

アブド（次男） — サイード

ハーイル（三男） — アハマド（長男 1932年生れ）

ジャーズィム（四男）

女 3人

ハーイルは20歳まで生まれ故郷の村で農業や縫製など父の手伝いをしていた。

1922年、兄2人（ムハンマド、アブド）とともにアデンに出て、英国船や仏船で働いた。1923年、マルセイユの工場に就職。10年間滞在した。

第二次世界大戦の気配が忍び寄り1933年、フランスを離れソマリアに移った。最初はフランス人革商人の代理店を務めた。故郷の村から甥のアリを手伝いに呼び寄せ、1935年まで2年間滞在した。

1935年、ハーイルはカルダ村に戻り、親族から募った資金を元手にアデンで布商売を始めた。しばらくして家畜の売買に商売替え。アデンに食肉が不足しているとの調査結果に基づく判断だったが、成功しなかった。

1938年、ハーイルは甥のアリと共に1,200ルピーでアデンのマアッラー地区に土地を購入、モスクのそばに店を構え、小売業と薬局を始めた。転機は1939年に訪れた。ベス商会のインド人社員バーリクがハーイルを信頼してくれ、配給券を扱わせてくれることになったのだ。おかげで銀行での借入れが容易になった。苦労はあったが、卸売業、食糧・生地貿易にと商売を拡大していった。それにともない兄弟のアブド、ジャーズィム、甥のサイード、息子のアハマドも商売に加わるようになった。

1950年、紅海沿岸の港町、モカとホデイダに進出した。

1952年には第二世代のアリとアハマドがビジネスの中心になっていた。1967年に南イエメンが英国から独立、1969年、国有化政策を発表した。そのため、1970年、アデンの店を閉めてタイズに本拠地を移した。

時代の流れ

その社長はくりくりとした目でこちらを睨んでいた。社長のファミリーはハドラマウトのシバームの名家だ。19世紀の半ばに一族の一人がインドネシアに渡った典型的なハドラマウト商人で、現在インドネシアには同じ姓を名乗る者が5,000人いると話した。社長の祖父が1920年代にハドラマウトで創業した会社は、後に紅海沿岸のホデイダに店を移し輸入業者として成功した。日本との関係では50年前にある企業の代理店となり、イエメンのトラック販売市場の3割を占めていた時代もあったという。それが時代の流れでその日本企業が他社に吸収され、その後トラックの生産自体が打ち切られてしまった。50年かけてイエメンの社会に日本製トラックのブランドを広めてきたのは社長の叔父だった。その叔父は「日本のブランドは一族にとって単なるブランドではなく家族の一員だ」と嘆き、その家族の一員が死に瀕しているのに手をこまねいて見ているしかない、「50年間の努力は一体何だったのか」と涙を流して怒り悲しんだという。この一族が販売していた日本ブランドの調理台もインドネシアで生産されたものに代わった途端に不具合が多発し、顧客の信用を失ってしまったとため息をついた。トラックの供給が止まり、空っぽのショーウィンドウを見て、社長の会社が破産したとの噂が飛びかったという。日本製品がアジア勢に圧倒される市場の陰で社長は日本への信頼を失っていった。イエメン人は今でも日本製品が一番だと思っていると社長は言った。なのに、競争力のある日本製品は激減している・・・と。今、社長の一番の取引先は韓国企業だ。

女性ドライバー

サナアでは、ヒジャーブ（髪を覆うスカーフ）をつけた上からすっぽりと黒い外套（アバーヤ）で身体を包み隠し、さらに、両目の部分だけを残して鼻から下の部分を黒いベール（ニカーブと呼ぶ）で覆った女性が圧倒的に多い。その彼女たちが車を運転していた。2013年当時、サウジアラビアではまだ女性は車の運転を許されていなかった。イエメン女性が歩く姿はずっと背筋が伸びて姿勢がいい。ニカーブをした女性は家族にしか素顔をみせない。挨拶を交わした女性に、「以前お会いしましたよね」と言われても目だけで記憶するのはとても難しい。ただ、ただ恐縮するだけだった。ある時、普段はニカーブを付けて目しか出していないジャーナリストがレセプションにニカーブをつけずに出席してくれた。黒いアバーヤで頭から爪先まで身体を覆っていたが、顔は隠していなかった。しばらく話して「x x xです」と名のられるまで、こちらは誰と話しているのか分からず、これも対応が難しい場面だった。

ある時、アデンからサヌア行きのイエメン航空機に乗った。そのフライトはドバイ発のフライトで、私が乗り込んだ時には既にドバイからの乗客が機内にいた。私の座席の隣には女性が座っていた。顔を出しており、目が会ったのでお互いに目で挨拶をした。飛行機がサヌア上空で着陸態勢に入ると、その女性は突然ニカーブを取り出し目から下の部分を覆った。私たちのキャビンにはイエメン人男性客も多くいたのに、それまで彼女は全く気にしていなかった。飛行機の中は外国の延長、特別な空間だったようだ。彼女はさっそうと飛行機を降りて行った、ニカーブ姿で。

イエメン女性はアクティブだ。私の秘書は極めて優秀で、日本人のように気が利き、言われなくても仕事をきちんとフォローしてくれた。同僚が頼りすぎるほどみんなの右腕になっていた。彼女の故郷、タイズ地方は昔から教育に熱心な地域で、開明的なイエメン人は男性も女性もこの地域の出身者が多い。女性活動家も圧倒的にタイズ出身者が多い。イエメンでは80年代になるまで大学がなかった。そのため古い世代は、高等教育を受けるために留学した。イエメン人学生の受け入れ先となったのが主にエジプト、次にイラクだった。ナセル、サダト時代のエジプトだ。エジプト留学組の中にはムスリム同胞団の考え方をもち帰った者もいた。1974年に北イエメンの大統領に就いたイブラヒーム・ハムディ大統領は、南イエメンの共産主義への対抗勢力としてイスラム主義者に門戸を開いた。それによりムスリム同胞団やサラフィストの思想の流入が進んだ。慈善事業団体を運営していたある女性は、タイズ周辺の女性は70年代までは色彩豊かな民族衣装を身にまとい、顔を出したスカーフ姿だったと語った。それが80年代に入ると徐々に黒いアバーヤ姿に変わっていったという。サウジアラビアから帰国したイエメン人出稼ぎ労働者がワッハーブ主義の風習を持ち込み、女性のニカーブ化が進んだという見方もあった。

一方、ソ連との関係を強めた南イエメンでは、留学先はエジプトからソ連、東欧など社会主義国に変わっていった。アデンの女性は黒いアバーヤを頭から羽織っていたものの、顔を隠すことはなく、社会進出も果たしていた。

なぜか足元が寒いイエメン人男女

サナアの冬は東京ほどではないが朝晩ぐっと冷え込む。それなのに町を歩く男性の足元は裸足にサンダル履き、夏のままなのだ。上半身は上着を着て厚着をしているのに・・・。そのアンバランスが不思議でユーモラスでもある。町行く人の足元を見ていると、靴下を買う経済的余裕がない人達だけが裸足というわけでもなさそうだった。本当に寒ければ靴下を買って履くはずだ。男性はディスダーシャにサンダル姿の場合は素足で決めるのだろうか。そこでサウジアラビアなど湾岸諸国の同僚大使の足元を、注意して観察してみた。冬には靴を履いていた。冬場は黒っぽい冬用のディスダーシャを着用している人もいるので季節感はあるのだ。サナアの人々に冬でもサンダルに素足である理由を聞くと、慣れて

いて寒さを感じないとか、靴を履くのが面倒だ、といった答えが返ってきた。変な質問だな、という反応をみせるくらい、イエメンの人々にはごく当たり前のことのようにだった。女性はどうかだろうと思って、街行く女性の足元を気にしていると、やはり素足で靴を履いている女性は何人もいた。

庶民の足

サナア市内の南に通称サバイーン（アラビア語で70の意味）と呼ばれるパレード広場兼道路がある。70メートル幅の一直線の地形からもわかるように、そこはサナアの旧空港跡だ。サバイーン広場に面してサーレハ前大統領が建てた巨大なサーレハ・モスクがある。サーレハ・モスクとサバイーン広場に隣接して広大な大統領宮殿の敷地が広がっている。サーレハ前大統領はそこを大統領官邸の一つとして使っていた。広場に立って南側をみると、小高い岩山が2つ、行く手を遮るように立っている。万葉の世界を思わせるような「乳房山」という艶な名前を町の人からいただいている。東側には旧市街を見下ろす「ノクム山」があり、西側では屏風状の岩山が外敵の侵入を阻んでいる。木一本ない岩山に三方囲まれた平地に、つきすぎた餅のように、べたっ、とサナアの新しい街並みが広がっている。

庶民の足となる交通手段は、高級な順に①タクシー、②ダッバーブと呼ばれる5人乗りのミニバス、③オートバイの3つだ。特に、オートバイはナンバープレートがついてないものも多い。オートバイの後部座席に人を乗せて移動を手伝う商売なのだ。通常の市内の移動だと日本円で30円（2013年当時のレート計算）。値段はダッバーブと変わらないのだが、ダッバーブは路線が決まっていて渋滞にはまる可能性があるのに対し、オートバイは自由にどこにでも行け、渋滞に悩まされないのが魅力だ。一日に25人～50人運ぶらしい。唯一の欠点は、運転手が男性だから女性客が利用できないこと。そのオートバイの運行が、国民対話が始まる2013年3月18日から一週間禁止される、と発表されたからたまらない。これを日々の稼ぎに家族を養うオートバイ業者は悲鳴を上げ、抗議の声を挙げた。

なぜ、政府は禁止したのか。オートバイを使った2人組による暗殺テロがイエメン国内で頻発したからだった。アル・カーイダは好んでこの手を使った。やっと開催に漕ぎつけた国民対話が政治テロで潰されてはかなわない。そうした思いがこの決定の裏にあった。しかし、さすがに国民和解を進める対話の時期であっただけに、政府もゴリ押しはできなかった。結局、営業時間の制限（朝6時から夕方7時まで）という裁定で決着をみた。（注：その後営業時間制限はさらに緩くなっていった。）

エチオピア産カートは良質

カートは軽い覚せい作用をもつ植物で、緑色の葉っぱや茎の柔らかい部分だけを摘まんで噛む。慣れないと選別が難しい。イエメンの人は親切で大抵柔らかい葉を摘まんで、これを噛みなよ、とくれる。左右どちらかの頬に溜めて液汁だけを飲み込む。最初はお茶の葉を噛んでいるように感じる。葉は捨てないで頬の裏側にどんどん貯めていく。瘤取り爺さんの瘤みたいに膨らむ。でも慣れないとできない。慣れていないと噛んでいるうちに噛んだ葉の破片が喉に落ちてきてすごく煩わしい。味はあまりない。おいしくもない。大体、中学生頃14～15歳から噛むと聞いた。たばこを始めるような通過儀礼の感覚か。何世紀も前にエチオピアからイエメンに入ってきたといわれ、今でもイエメン、エチオピア、ソマリアなどアフリカの角を中心にカートを噛む習慣がある。カートを噛みながら水を飲むのが今では主流だ。昼食後の午後3時頃から噛みはじめ、7時、8時、・・・人によっては深夜まで噛み続けるらしい。その間にペットボトルの水を2本、3本・・・と飲むので、ミネラルウォーター製造はよい商売だ。

サナア県知事主宰のカート・セッション、カートが手前に山積みになっている。



カート・セッションのルールは、自分のカートは自分で持参することのようだ。ただ、外国人はこのルールに従う必要はなさそうだった。たいてい同席者がくれる。富裕層がホストする集まりではお客にカートが振舞われる。その時に出るのは良質のカート。一束40,000リヤル～60,000リヤル（2万円～3万円）の上物だという。エチオピアからその日に空輸されてきたものが出ることもある。一般庶民は一束700リヤル～1000リヤル（350円～500円）程度のものを買うらしいが、それでも彼らの日当が1000リヤル程度の国だから決して安くはない。当時、国民の45%が一日2ドル以下で生活していると国連資料には書かれていた。

人々はカート市場に行ってカートを買う。市場によって産地が決まっている。市場とい

っても汚いキオスクみたいなのがいくつも並んでいるか、屋台、あるいは荷台にカートを集めたトラック（シャス）がたくさん集まっているだけだ。カート市場の周辺は大体交通渋滞しているし、けんかや発砲事件も多い。一般のイエメン人が噛むのは一束5ドルくらい。ほとんどの人は一束も買えないだろう。地方に出て警備をつけてもらうと、一日の日程の最後に警備兵一人一人にカート代として10ドル程度配るのが習わらしく、10〜20人警備がつくから出費が大変なんだ、とある大使が嘆いていた。

現在、このカートがイエメンの社会問題になっている。家計収入の20%がカートに費やされる。カート撲滅協会会長のアブドルワシ・ハーイル・サイードによると、ある労働者は、毎日1500リヤルをカートに使い、家族（妻と子供合わせて6人）の生活費として500リヤルしか渡していなかった。家族が鶏肉を口にするのは月に1回、果物を食べるのも週に1回だったという。

イエメン人に聞くと、人々が節度なく何時間もカートを食べようになったのはここ20〜30年のことだという。経済状況の悪化にともなう失業者の増加や生活苦、暇つぶしも背景にあるというが、カートを噛む場は社交の場であり情報・意見交換の場でもあるようだった。それまでカートを噛む風習がなかったハドラマウトに北部出身者がカートを持ち込んだのも1990年の南北イエメン統一後だと聞いた。社会主義政権下では週末しかカートの販売ができなかったアデンでもそうした規制は南北統一後になくなり、カートが広まっていったという。それでもサナアにいる南部出身者でカートを好んで噛む人は少ないように思えた。

サーレハ前大統領は過去にカート禁止令を出したことがあるが、カートを噛ませておけば政府に刃向うことを考えないと入れ知恵されて半年で禁止令を撤回してしまったとも聞いた。不思議なのは、外国にいる時は全く噛まなくても平気だと多くの人が述べたことだ。イエメンに帰ってくると噛みたくなるらしい。

カートに中毒性はないが、カート栽培には大量の水が必要で、イエメンの水の25%〜35%がカート栽培に使われる。3年ほどで成長し、年に3回も収穫でき現金収入を得られるので、コーヒー栽培もカート栽培に負けてしまう。とにかく手っ取り早く収入を得られる作物なのだ。農地が奪われ、違法な井戸掘りが横行し、貴重な水資源を奪う。他方、カート消費者の食欲は減退し、食事をしない。歯周病が蔓延する。それに栽培には大量の農薬が使用されているのでカートの葉は農薬まみれで、癌の発症率が急増しているという人もいた。青少年が噛むと食欲減退のために栄養が十分とれず発育不全になる。毎日午後になると、タクシーの運転手も、スーパーマーケットの店員も、警察官も、みんなカートで頬を膨らませる。少年たちが路上に座ってカートを噛む姿は醜い。名を成し、功を成した年配者がサロンでカートを噛みながら政治、経済、文化談義にふけるのは良き伝統だと思うが、青少年が街中でカートを噛む姿は中毒そのものに見えた。

結婚式も、入口に立つ親族に挨拶し、新郎に挨拶した後は、マフラジュ（腰を下ろして座るための座椅子式ソファがある場所）に座ってカートを噛む。葬式も入口で親族にお

悔やみを言った後、マフラシュに座ってカート进行を噛む。あるお金持ちの結婚式では主催者がお客にカート进行を振る舞い、3000万リヤル（1500万円）使ったと噂された。

カート撲滅協会会長のアブドルワシアは2週間前に息子二人の「カートなし結婚式」を行ったと語った。彼の息子たちは親の姿をみて誰ひとりカートを噛まない。カート撲滅協会は「カートなし結婚式」の支援もしていた。お茶菓子代を支援するのだという。また、カート市場を郊外に出すことをサナア市長と相談したり、TV広報や学校での生徒への広報を実施したりしていた。私も初めて、アブドルワシア家の「カート抜き結婚式」への招待を受け出席した。こういう動きが広まればイエメンも変わるだろうと思った。

結婚式に招待された男性、新郎に挨拶した後は、もっぱらカートに集中する。



弔問はカートを噛んで

イエメンで弔問にはじめて行った。知己を得た元文化大臣の甥っ子が亡くなったのだ。故人の家か親族の家を訪ねるのかと思きや、到着したのは市内の貸しホールだった。広さ2,000平米ほどの平屋のホールにはカート・サロン用の座椅子式ソファ（床にあぐらを組んで座るので、お尻の下と背もたれにクッションがあり、左右の肘かけで仕切られているボックス型のソファ）が何列にも置かれ、午後4時半に到着した時には既に300人ほどが座って思い思いにカートを噛んでいた。勿論、男ばかりだ。レシービング・ラインとは別に、会場入口付近に故人の親族用の席があり弔問客から弔意を表されていた。弔問客は弔意を述べた後、持参したカートを30分か1時間ほど噛んで、辞去の挨拶をして帰るのだ。カートを噛む時間に合わせるので弔問は午後の昼食後、3時か4時に始まる。サナアの治安が特に悪化した2010年頃から有力者が弔問に来ると1人につき4人ほどのボディガードが付いてくるので、サナアではこうした貸しホールスタイルが始まったそう。村ではテントを張って弔問客を迎えるそうだが、カートを噛むのは同じらしい。こ

れがイエメンの流儀だ。トルコやパレスチナでは喪主の辞淹を訪問して弔意を述べるとトルコ・コーヒーが振る舞われて10分ほど話して辞去する形式だった。イエメン流儀にはカート文化の奥深さを知らされた。さすがに写真を撮るのは不謹慎と思いとどまったが。

女性の弔問は、アスル（午後）のお祈りから夕方6時頃までの間に行く。不幸があった家の玄関で挨拶した後、マフラジュに座る。コーランとマウリドが年配の女性により詠唱されている。年配の弔問客にはカートを噛む人もいる。自分の都合に合わせて10分で帰ってもよいと聞いた。

楽しきカートの集い

イエメンの少し裕福な家にはカートを噛むサロンが応接室とは別にある。2世帯住宅だと2か所ある。明るい最上階にあることが多い。女性も男性ほどではないが女性同志のカート・セッションがある。サヌアに到着して間もなくあるビジネスマンに昼食に招かれた。カルビー外務大臣や元大臣など有力者20人ほどが集まっていた。みんな親しい仲間のようだった。食後のカート、ここはまさに知的サロンだった。カートを噛まないカルビー外務大臣は食事が終わると帰って行った。誰にも無理強いしない。噛みたければ噛む。噛みたくなければ噛まない。この自由さがよかった。先日カイロで買ったという本の話（イエメンにはアマゾンの配達がなかった）、環境問題の話、勿論政治の話……。みんなリラックスしていて雰囲気がいい。気心知れた者だけだと余計にそうなるのだろう。日本の飲み会のようなものだ。こういう大人の雰囲気のカート・パーティはひとつの文化、伝統と思えた。街中で青少年が頬を膨らませながら歩いたり、タクシーの運転手が瘤取り爺さん状態になっているのとは違うのだ。

ある金曜日の午後、別のビジネスマン宅を訪れると既に6人集まっていた。柔らかな高級なカートが振る舞われた。4時半までにさらに3～4人が集まった。今日は集まりが少ないという。隣に座った部族長がカートの摘み方を教えてくれた。彼らの口語での会話が難解な時にはアラビア語の文語体や英語に直してくれた。参加者は皆、主催者のビジネスマンの仲間たちで、バキール部族連合に属する部族の部族長ビジネスマン、ミドヒジュ部族連合に属する部族の部族長（彼の息子はバキールの部族長ビジネスマンの娘婿）、元地方行政・職業訓練大臣、元大使、元高等教育大臣、元保健大臣、紅海沿岸のティハーマ出身のビジネスマンなどだった。部族長といってもサヌアに住んでいて、職業はビジネスマンや諮問評議会議員など様々である。元高等教育大臣是最長老で寡黙だが、その情勢分析は鋭く、みんなから敬意を払われているのが分かった。

話題は、その日に起こったある部族長暗殺事件、政府の人事異動を巡る記事、GCC外相会議の声明とサウディ・カタール問題の関連性、イエメンの10ファミリーがイエメンの商業利益の80%を独占していると書いたチャタムハウスの報告書、資産流失と投資税

との関係、イエメンからの資金逃避問題、ドーハ・ラウンド、WTO問題、FIFAとカタールのワールドカップ開催の問題、サッカーの話題、日本人の道德観、質の高い人材・能力開発、財閥解体、NHKワールドチャネルのアラビア語放送希望（日本だけでなくアジアのニュースが多いことを評価していた）など多岐にわたった。難しいのは、ひとりが話し始めても途中で口を挟まれ、最初の発言者が最後までなかなかしゃべれないことだ。話の中に故人が出てくると、一堂で敬意を払う言葉を唱和する。携帯電話は鳴るは、こちらからも掛けるは、せわしない。午後8時前にお開きになるまで話は続いた。勿論、途中で帰るのは自由。夕暮れとともに帰る参加者もいた。とにかく自由に、思ったことを話さう。イエメン内政だって平気で話す。この国で秘密を守るのは難しいだろうな、と思った。

このグループは毎週金曜日にホストのビジネスマン宅に集まってくる。部族長ビジネスマンは15歳ころからカート（葉を噛む）を噛み始めたと言った。口内に溜め、噛み切るほども強く噛まないのが溜めるコツだと教えてくれた。彼らはカートを噛むとは表現せず、「溜める」という単語を使うのも頷ける。ビジネスマン氏が振る舞ってくれたカートは本当に柔らかく高級品だった。床に捨てられた、一人の参加者が持参したカートをみると、枝に大きな葉が残っていたが、振る舞われたカートには固い部分や大きな葉など一枚もなかった。カート・セッションで困ったのは、カートを噛むとおしっこが出るのが悪くなることだった。自分だけかと思って、ある時話題に出してみたら、みんなそうだというので安堵した。

帰宅してウイスキーを飲んで寝よう勧められた。実際、そうしないと寝つけなかったが、翌朝、気分が悪かった。一日中、頭が重く、むかむかしていた。カートのせいなのか、ウイスキーのせいなのかは、よく分からなかった。

カートのない社会をめざす

ある日、「カートのない国を目指す団体(Moasasa al-iradah li watan bila qat)」主催の行事に参加した。カルビー外務大臣後援のイベントで、この団体の代表はイスラーハ党のアブダッラー・アル・アクワ対外関係部長だった（同氏はその後、電力大臣兼副首相を務めた）。アブドルワシヤ・ハーイル・サイード・カート撲滅協会会長、イスラーハ党国会議員団長のゼイド・アル・シャミー、イエメン・タイムズ紙社主のナディア・サッカーフ（2014年に情報大臣になった女性）が来賓として参加していた。外交団からは英国臨時代理大使、EU大使、トルコ大使と私の4人が出席した。

同団体の広報資料には「カートを噛むと、カート代、水750ミリリットル・ボトル1本、たばこ1本として一日1000リヤル（約5ドル）かかる。毎日カートを噛むと、ひと月で30,000リヤル。これだけあれば、私立学校に子供3人通学させられる。あるいは、家賃一月分を払える。あるいは鶏肉30羽、又は肉12キロ、又は砂糖、米、タヒーナ、牛乳、食用油が買える」とあった。

カルビー大臣のスピーチのポイントはこうだった。

カートはイエメンにとって弊害以外何ものでもない。カート撲滅は政府の責任でもある。農民に代替作物を示す必要がある。政府、メディア、教育現場、家庭、地域社会が一体となって行動する必要がある。毎年1月の最初の木曜日を「全国カートのない日」に定めた。ほとんどの国民から嘲笑されるだろうが、気にすることはない。行動を起こすのだ。これまで三度、カート撲滅運動を経験した。最初は50年代のアデンだ。カート取引が禁止されたが、しばらくして元に戻ってしまった。二度目もアデンでの経験だ。アデンから多くの学生が海外留学した。最高学府の学位や修士、博士号を取得した超エリート、外国の文化、社会を知る知識人であった。にもかかわらず、帰国するとカートを噛んだ。三度目はサナア大学で教鞭をとっていた時。アハマド・ジャービル・アフィーフ教授がカート撲滅運動を進め、サナア大学理学部がカートの弊害について科学的調査をはじめた。スウェーデンの大学に調査を依頼した。人体にあらゆる悪影響があり、よいことは何ひとつないという結果だった。この調査は予算不足のために途中で辞めざるを得なかったが、有志はカート撲滅運動を展開した。我々は、カートのないイエメンを目指したが、結果は、イエメンが失われてしまい、カートが残った。カートを噛む風習で、子供たちの世代や家族が苦しむ。モスクでの説教を通した人々への啓蒙活動も重要だ。この悪習との闘いを継続しよう。カート撲滅運動は、新しいイエメン建設に向けたひとつの変化の徴だ。

(参考資料) ホスニ・アハマド・ジャウシャイ教授の「カート噛みに関する自信ある意見」からの抜粋

カート栽培：地下水（消費量）の70%を消費

カート栽培農地所有者には高い税が課せられているが、80%は国庫に入らず霧消。

良質のイエメン産カートの産地：ハッジャ州、サナア州、バイダ州、ダマール州（標高2100メートルから2700メートルの高地）。標高900メートル以下では育たない。

カートの背丈：種類による。最大2メートル～最少30センチ

カートの賞味期限：収穫後40時間経つと覚せい効果がなくなる。

カートの収穫：肥料をやれば、年2～3回の収穫。

最高級品：カート・シャーミー（ハッジャ州産）。1人4時間分で50ドル～200ドル。

次に、バラディ、ダラーイー、ハムダーニ、アル・アンシーと続く。

最廉価品：コトゥル、ソーティ。3ドル～10ドル（注：労働者日給5～8ドル）

カートを噛む人口：推定で（人口の）80%

噛む場所・時間：昼食後サロンで、夕食のお祈り後までが普通。深夜まで噛む人も。

噛み始める時期：10歳。大人の仲間入りの儀式。同年代の仲間からの圧力

カートの風習がある国：イエメン、ケニア、ソマリア、エチオピア、ジブチ

カート人口：世界で50百万人

結婚式

イエメンではラマダン明け祭日と巡礼明け祭日の間の2か月間が特に結婚式シーズンとなる。水曜、木曜は、結婚式場は大忙しだ。知り合いが弟と一緒に結婚式を挙げた。経費節約のために兄弟が合同結婚式をするのがイエメンでは一般的だという。そのために弟が兄の相手が見つかるまで2年間待ったというケースもある。

受け取った招待状には、結婚式前夜のサマラという集いと結婚式本番の2つの行事への招待が書かれてあった。勿論、男だけの結婚式への招待だ。サマラは夕食のお祈りイシャーの後から始まる。イシャーのしばらく後に会場に着いたが、8時半を回っているのに人はまばらで新郎はまだ到着していなかった。新郎は今、自宅を出ようとしているというので自宅に向かった。自宅の中庭ではお祝いの民族ダンスが始まっていた。新郎は中庭に通じる階段の上で神妙な顔つきをして踊りを見ていた。新郎の父がその傍にいた。私のような来客が次から次へと新郎に祝意を述べに行き、必ず一緒に写真を撮る。そうした光景が30分は続いたろうか。

いよいよ家の門に向かう。門を抜ける直前に敷居に卵を投げて割った。邪悪除けだという。外に出てまっすぐ会場に向かうのかと思いきや、家の前で婚礼祝いの歌と音楽（ミズマールと呼ばれる）が始まった。新郎は用意された椅子に腰かけてそれを見守る。その間にも来客が到着し新郎に挨拶しに行く。男ばかりの民族ダンスが続く。音楽DJが雇われている。イップの踊り、ハドラマウトの踊り、サナアの踊りと続く。新郎はサナア生まれだが、家族はサナアの南にあるサンハーンの出身だ。サーレハ前大統領と同じ出身地だ。踊るのは式に招かれた客人たち。みんなお祝いの心を籠めて踊る。よく見るとそれぞれの地方で、踊りの振り付けやステップ、集合ダンスの仕方が違う。それが小一時間続いた後によりやう会場に向かった。

サマラの会場に到着すると400人ほどの客が既に集まり、思い思いにカートを噛みながら新郎の到着を待っていた。カートで出来上がっている風体の人も多い。その時ふと気づいたのは、何と会場の中央後方から中央雛壇に向かって作られたキャットウォークだ。新郎はその上を歩きひな壇に向かうのだが、次々とお祝いを述べに来る友人、知人、親族がいるためなかなか前に進めない。30分ほどかけてようやく会場正面のひな壇に上ると、そこにまた会場内の招待客がめいめいにお祝いを述べに集まる。その間にも会場に招待客が次々と到着する。この時点ですでに夜10時30分を過ぎていた。挨拶の客が途切れた頃によりやう音楽、ダンスが始まり、未明を過ぎても最後のお客が席を立つまで延々と歌舞音曲入りのカート・セッションが続くという話だった。

二日目の結婚式はもっとあっさり型だったが、会場の規模がとてつもなく巨大だった。床にはマフラジュ（腰を下ろして座るための座椅子式ソファ）が何列にも所狭しと置かれている。1000人は座れるだろう。サナアで一番大きな大会場で、その名も「大会場」。会場に入ると、入口に家族、親族が20人ほどレシービング・ラインを作っている。挨拶を済ますとひな壇に立っている新郎に挨拶に行き、記念写真を一緒にとり、あとはマフラジュに座ってカートを噛みながら過ごす。10～15分座って帰る人、しばらく腰を据えて小一時間カートを噛んで帰る人、どっしり腰を落ち着けてカートを噛んでいる人、挨拶だけで帰る人、・・・さまざまだ。お祝いの音楽が鳴り響く。前夜の結婚式（サマラ）もそうだが、カートは来客が持参していた。結婚式は午後3時ころから始まり夕暮れまでには終わる。そのあとは親族で少人数の食事をして午後11時にはお開きになるそう。そのあと初めて新郎は新婦に会える。

それまで新婦はどうしているのか。この疑問にある婦人が答えてくれた。新婦は前夜から全く別の場所で、男の集まりよりは遥かに楽しく、比較的少人数で、歌や踊りや食事を楽しんでいるそう。

一日目は、新婦の家で午後6時頃から始まる。黒いアバーヤの下に思い思いの衣装を着こんで出かける。歌あり、踊りあり、ディスクジョッキーを雇って深夜までフィーバーする。その間に飲み物、お菓子、スナックが出て、思いっきり楽しむ。おしゃれはするが、町のドレス店に飾っているような露出度の高い衣装を着てくる人はまれで、そういう人がいると周りからちょっと変な目で見られる。

二日目は、午後のお祈り（アスルのお祈り）から午後6時ころまでの間に新婦の家を訪ねる。入口で親族にお祝いを述べた後は、しばらくマフラジュに座ってお茶を飲んでお喋りして帰っていく。

男性がレンタルの式場に集まって、レシービングラインに立つ関係者に挨拶し、それから好きなだけカートを噛むのは結婚式も葬式も同じなのだ。違いは何かと結婚式のマフラジュで隣にいた外務省幹部に尋ねてみた。葬式ではみんな神妙な顔をしていること、葬式では写真を撮らないこと、結婚式は歌があり、葬式はコーランの詠唱だけ。勿論、出席者の気持ちは全然違う、との返事だった。その時、会場に一人の部族長がカラシニコフを肩にかけたボディガード数人に囲まれてやって来た。隣の幹部に部族長の責任と役得について尋ねてみた。責任は、部族間の紛争の調停、部族構成員同士の問題の調停、部族の利益のために政府への働きかけ。役得は、政府からの月々の手当を受取ること、選挙の時、自分の声が部族民全体の声になること、国会議員に当選できること。これが答えだった。部族民で困窮した者を部族長は財政的に助けるのかと尋ねたところ、答えは「NO」だった。

イエメン南部の山岳地域、飛行機の窓から撮影。



サナアからムカッラを経由してソコトラに飛ぶサイダ（フェリックス）航空は思いのほか快適だった。70人乗りのエムブレア機がサナア空港を飛び立つと眼下には茶褐色の村々とわずかな耕作地が広がってきた。ほどなく先がとがった岩山が密集する山岳地帯に景色は一変する。地表の様子がなんとも幾何学的で美しい。15分ほどすると右手前方で水面が朝日に映えていた。マアリブ・ダムだろう。といっても、アラブ首長国連邦のシェイク・ザーイド・アール・ナハヤーン大統領の支援で作られた現代版。ナハヤーン家はイエメンにルーツを持つといわれ、シェイク・ザーイドには思い入れがあったようだ。しかし、このプロジェクトは問題があった。灼熱の太陽に照りつけられ貯水はかなりの速度で蒸発、その結果、水の塩分濃度が高くなってしまったのだ

このマアリブ・ダムを境に地形は突然不毛の砂漠に変わる。砂の波紋が美しく、波紋の形状も場所が移ると変化していく。山岳の民と砂漠の民、いく度戦いを重ねてきたのかと思いを馳せていると、今度は岩山の頂が平坦な、台形の岩山高原地帯に入った。ハドラマウトだ。数々の深く切れ込んだワーディ（涸れ河）が見え、目を凝らすとワーディ沿いにだけ狭い緑地や低い樹木が見える。岩山の高原地帯は、東はオマーン、北はルブウルハーリー砂漠まで続く。最大標高は1500メートル。海岸線に沿った沿岸部だけが平地だ。

しばらくして機体はムカッラ郊外のリヤン空港に着陸した。サナアを発って45分、ムカッラで乗客を降ろし、そこからソコトラ島に向かう乗客を乗せてフェリックス航空機はゆっくりとアラビア海上空に舞い上がった。進路は西、25分の旅だ。15分ほどで機体が高度を下げはじめると、前方の雲間に島影が見えてきた。ソコトラ島だ。埼玉県と同じ面積なので大きく見える。機はゆっくりと、海に向けて一直線に伸びる滑走路に降下していった。3600メートルの滑走路はイエメン最長である。

空港から島内随一の町、ハディブに向かう。右手に見える、一面緑に覆われた山、植生、民家のたたずまいは南洋の雰囲気漂わせている。左手にトルコブルーの海を見ながら道

路は海岸線を走る。右手にソコトラ名物のボトム・トリーが群生する山が見えてきた。ソコトラにやってきた！ハディブの町は目抜き通りが一本だけ。その目抜き通りも100メートルほどしかアスファルト舗装されていない。ソコトラは貧しい。降水はあるのに貯水施設が不十分なため農業もほとんどない。自然のナツメヤシはあるが、小麦もコメもトマトも何もかも本土から船で運ばれる。ソコトラの住民は「輸入している」と表現する。本土との遠さを感じさせる表現だ。海辺に石ころと土で固めた粗末な「はしけ」がひとつあるだけだった。これが島の生命線かと驚く。ソコトラ島が旧南イエメンの社会主義政権下にあった頃、ソ連がソコトラ島に海軍基地を持っているとの噂が絶えなかった。実際には南イエメン政府の依頼でソ連海軍の船が物資をソコトラに運んでいたのだ、と旧ソ連海軍関係者は述懐している。あるアデン出身のビジネスマンは、南イエメン政府は同性愛者をソコトラ島に島流しにしていたと声を潜めて語った。

ソコトラ島には産業がない。島には年間250ミリの降水があり、一年を通して雨が降る。しかし、貴重な真水が海に流れ込んでいるのが現状だ。そこでワーディに流れる水を堰き止め貯水するプロジェクトが始まっていた。ファリード・ムジャウワル農業大臣は、主婦たちに家庭菜園を奨励するプロジェクトを広めようとしていた。ある菜園では、トマト、ズッキーニ、豆、オクラなどの野菜とスイカ、パパイヤといった果物が栽培されていた。農業省ソコトラ事務所に選ばれた主婦が苗木を育て、希望者に配布する。住民の栄養不足を自助努力で補うのが目的だ。「みんなが一生懸命やるのなら、農業省も支援する。」これがムジャウワル大臣の女性たちへのメッセージだった。島では6〜7メートルも井戸を掘れば水が出る。水と電気が島の一番の問題。水をくみ上げる動力に小型太陽光パネルを使った野菜栽培も試験的に始まっていたが、主婦たちは曇りの日には水をくみ上げられないとこぼしていた。家庭の井戸は手押しポンプ式だ。

住民は風貌からしてアフリカ住民、インド住民の血が混ざっていることがわかる。島独特のソコトラ語を持ち、ソコトラ語の「フカッテクシュ・ソコトラ」(I miss Socotra)が観光キャンペーンの標語であった。アディーブは自分の年齢を正確に知らない。65歳か、70歳だろうと笑う。浜辺に9部屋のコテッジをもっている。共同シャワーが2つ、共同トイレが3つ。一泊日本円にして500円だ。ソコトラ周辺にだけ生息する魚を求めてイタリアから若い釣り師が泊まりにきていた。アディーブに最も幸せだった時代を尋ねると、1970年代だと答えた。それまではナツメヤシか、海でとった魚しか島には食べ物なかったが、1970年代になってそれ以外の食物が食べられるようになった、というのが理由だった。米を食べる習慣もこの頃からで、今ではピタパン同様主食になっている。

アディーブは農業省の支援で竜血樹の苗木を育てていた。夢はソコトラの植物を集めた植物園を作ること、既に造園が始まっていた。竜血樹は島中央の山間部ディクシムにのみ生育する。年間1センチほどしか成長しない。今ある成木は何百年もそこに立っているわけだ。竜血樹の樹液は万病に効くと信じられているため竜血樹は長年にわたって伐採され、数はどんどん減少している。農業大臣は「竜血樹なくしてソコトラなし」との意気込

みで竜血樹復活のパイロット・プロジェクトを立ち上げ、1000本の苗木をディクシムのムハンマド村長に託していた。ムハンマドの奥さんはチェコ人、ソコトラ島に調査でやってきた学生だった。ソコトラには乳香（ルバーン）の木もある。しかし、ソコトラ住民が炭を作るために伐採するためこれまた絶滅の危機に瀕している。アディーブの息子は、英国人植物学者はソコトラには9種類の乳香があると記しているが実際には7種類しかない、と主張していた。

ディクシムは島の北海岸と南海岸を結ぶ道の間中点にある。ディクシムを過ぎると竜血樹はなくなり、一転してソコトラのもうひとつの名物ボトム・ツリーが群生する地域に入る。一番の生育地域は北海岸の東側だ。南海岸はインド洋に面し6月～9月中旬にかけてのモンスーン時期には南西の風が時速170キロメートルの勢いで吹き荒れ、船でのアクセスは不可能となる。インドのグジャラートの水夫たちは、ソコトラ沖で鳴り響く強風の唸りを「ソコトラのライオン」と呼んだという。南部海岸にはドグブ洞窟（Dogub Cave）があり、鍾乳洞になっている。海岸線からドグブ洞窟に向かう平原には一面に薬木が樹生していた。止血効果があり、一時期チェコの会社が商業化しようとする動きもあったと聞いた。

ソコトラ島で、竜血樹と南部の衣装を着た男性



ソコトラへの観光客は2013年当時、年間3,000人程度にすぎなかった。それもエコツーリズムが中心だった。ドライバーのアブドゥラウフは、良くて年に8か月しか仕事がないとこぼしていた。モンスーンのため5月中旬～9月中旬は観光客が訪れないからだ。南アフリカから来たというバードウォッチャーは、ソコトラ島でしか見ることができない9種の鳥を探しに来ていた。既に7種は観察できたと嬉しそうに話していた。ソコトラ島をインド洋のガラパゴス島—そう呼ぶ人もいる。(5月号に続く)

注

III イエメン社会の諸相

(1) : Haartez August 14, 2013 "Family Reunited Jewish Agency airlifts 17 Yemeni Jews to Israel in Covert Operation" by July Maltz

(2) : BBC News Website March 21, 2016 "Yemeni Jews brought to Israel in secret mission

(3) : The Times of Israel March 21, 2016 "Operation to rescue 17 Jews was 2 years in the making, son says"

(4) : The Times of Israel August 9, 2020 "UAE helps reunite Jewish family that separated 15 years"